

「不条理を打ち破る」

イエスがエリコに近づいたとき、一人の目の見えない人が道端に座り、物乞いをしていた。彼は群衆が通って行くのを耳にして、これはいったい何事かと尋ねた。ナザレ人イエスがお通りになるのだと人々が知らせると、彼は大声で、「ダビデの子のイエス様、私をあわれんでください」と言った。先を行く人たちが、黙らせようとしてたしなめたが、その人はますます激しく「ダビデの子よ、私をあわれんでください」と叫んだ。イエスは立ち止まって、彼を連れて来るように命じられた。彼が近くに来ると、イエスはお尋ねになった。「わたしに何をしてほしいのですか。」するとその人は答えた。「主よ、目が見えるようにしてください。」イエスは彼に言われた。「見えるようになれ。あなたの信仰があなたを救いました。」 ルカの福音書 18章 35～42節

不条理から脱出

一人の盲人とイエスとの出会いです。彼は、目が見えません。彼の居る場所は、道ばたです。そして彼のしていることは、物ごいです。

当時、盲人や身体に障害を持った人々を束ねているヤクザのような人がいたそうです。そしてそのヤクザに、毎日どこかに配置されて物ごいをさせられ、上前を取られるということがありました。

彼が盲人になったことは、彼が選んだことではありません。彼が物ごいをしているのも、彼が選んだことではありません。今日彼がこの道ばたに置かれたのも、彼が選んだことではありません。強い者から搾取されるという不条理な人生も、彼が選んだことではありません。

しかし神は、彼を選んでいました。すべての事は、この道ばたで、今日、イエスに出会うために、そしてイエスについて行く者になるためだったのです。

ドイツの神学者ティーリケは「試練の中で、私たちは、なぜと祈るのではなく、何のためにと祈るべきである。」と言いました。

「なぜ」とは、不条理な人生を生きる者のことばです。私たちは人生の道ばたに佇み、「なぜ」と問うことが多々あります

この世における人生は、不条理で満ちています。不条理とは、「道理の通らないこと」です。哲学的には「人生に何の意義も見いだせない、人間存在の絶望的状况」と説明されています。

なぜ、正しい人がやせ細り、不正ばかりしている人が肥え太るのか。なぜ、これからの余生を夫婦で楽しもうという時に病を得るのか。なぜ、正直者が馬鹿を見るようなことが起こるのか。今ある状況に対する理にかなった説明が出来ない時に、人は不条理という暗い檻の中に閉じ込められます。

それに対して「何のために」とは、信仰によって歩む者のことばです。「なぜ」に対する答えは得られないことがしばしばありますが、「何のために」という問いへの答えは明確です。それは、主ご自身を知るためです。

主ご自身を知る時、私たちは、主の愛、主の義、主の癒し、主の力、主の平安、主の慰め、主の希望… 主の恵みを知るのです。

主を知った恵みの絶大さのゆえに、もはや「なぜ」という問いは消え去り、不条理の檻は打ち破られ、人生に希望の光が射し込むのです

イエスこそ「道であり、真理であり、命です」。真の道理は、イエスにあります。イエスを知るとき、すべては賛美に変えられるのです。この盲人のようにです。

今回は、この盲人とイエスとの出会いを通して、不条理を賛美に変える主の恵みに想いを向けていきましょう。

ナザレのイエスがお通りになる

すべては、この盲人が「耳にした」ことから始まりました。彼は、ただならぬ群衆の気配を「耳にしました」。彼の目は見えませんでした、耳は開かれていました。目が見えない分、彼は聴くことに長けていたのでしょう。

信仰は、聴くことから始まります（ローマ 10:17）。彼が聴いたことばは「ナザレのイエスがお通りになる。」です。たったこの一言を聴いた事から、彼の人生は変わり始めるのです。

ナザレのイエスと呼ばれている方は、至るところでいよいよ奇跡を行っている、この方こそメシヤに違いない。そのお方が、自分のいる道ばたの道を通り過ぎようとしているのです。

私たちも、この一言を聴かせていただきましょう。

あなたの目の前を「ナザレのイエスがお通りになる」

想像してみましょう。イエスは歩いておられます。あなたの目の前を通り過ぎようとしています。あなたの声イエスに届くのは、数十秒だとしたら、あなたはどうしますか？

話したいことは山ほどあります。しかし時間は十分にありません。自分の生い立ちから現在まで、今の詳しい状況と必要について、自分の苦しく辛い思いを全部話していたら時間が足りません。数十秒しかないのです。省いて省いて、これだけはどんなことがあっても伝えたいという、それはどんなことばでしょうか。

この盲人は、大声で叫び始めました。「ダビデの子のイエスさま。私をあわれんでください」と。これは、彼にとっての信仰告白です。「ダビデの子」とはメシヤの称号です。イエスをメシヤ=キリストと告白しているのです。そして、「私をあわれんでください」と言うのです。この叫びにイエスは、立ち止まってくださったのです。

彼が叫んだのは、イエスは救い主であること、そして自分はあわれみを必要としている弱く貧しい存在であること、この二つの事だけです。この二つの事が分かる時が、私たちが主に会おうときなのです。

それにしても、盲人が叫び始めると「先を行く人たちが、黙らせようとしてたしなめた」のです。今の時代も同じです。私たちが主に向かって叫び始め、信仰を告白し、自分自身を

表現しようとするとき、必ず黙らせようとする力が働くのです。それが不条理に満ちたこの世の力です。しかし、盲人は、さらに大きな声で叫び続けたのです。それは、まるで不条理という檻を打ち砕くハンマーの響きのようです。

ことばを引き出すイエス

立ち止まったイエスのもとに、盲人が連れて来られました。そこでイエスは「わたしに何をしてほしいのですか」と尋ねられたのです。すでに「私をあわれんでください」と、イエスにして欲しいことを言っているように思えるのですが、イエスは、あえて問いかけたのです。

当時の社会状況から考えて、この盲人に「あなたの考えは？」と問いかける、つまり、彼の人格を尊重するような事は無かったと考えられます。もし彼の目が開かれても、損なわれた人格＝神のかたちを回復しなければ、彼の人生は変わらないのです。

彼のような状況にある人に、衣服を与え、食事を与え、住居を与え、仕事を与えることは、実際的な助けとして必要なことでしょう。しかし、その人の人格が変えられなければ、人生は変わらないのです。そこでイエスは、まず彼の内に埋もれている神のかたち＝人格を呼び覚ますために、彼のことばを引き出そうとされているのです。それも具体的にです。

求めることが抽象的であれば、答えも抽象的です。求めることが具体的であれば、答えも具体的な答えが返ってきます。

イエスは、彼の内から、彼自身のことばを引き出し、人格を回復し、目が開かれた後の新しい人生を歩む備えをしてくださっているのです。

今、主が私たちに「わたしに何をしたいのですか」と問われたら何と答えますか？ 隣人は関係ありません。皆がどうかも関係ありません。自分はどうか、世界でたった一つしかない自分のことばで答えるのです。

この盲人にとっては、千載一遇のチャンスです。最初で最後のチャンスです。今の私たちは、明日でも、何度でも求めることが出来るでしょう。しかし、もし一度しかないチャンスだとしたら、あなたはなんと答えるでしょうか。

選ばれて、選ぶ

盲人は、「主よ。目が見えるようになることです。」と答えました。そこでイエスは、「見えるようになれ、あなたの信仰があなたを救ったのです。」と言われました。

「あなたの信仰」ということは、盲人が「私の信仰」を持ったことを意味しています。信じることは選ぶことです。彼は、信じることを選んだのです。選ぶことを否定されて生きて来た彼を、神が選んだのです。そして今、彼は選ぶことのできる者に変えられたのです。しかも、神の御心を選んだのです。

私たちが選ぶとき、不条理の檻は完全に打ち破られます。

不条理と運命論は一体です。運命論とは、私たちが何をしようと、どちらを選ぼうと、最

初から結末は決まっているということです。選ぶことは無意味なこととなります。不条理、運命論、それらはまさに、選ぶという人格＝神のかたちを否定するものに他なりません。私たちは、選ぶという人格＝神のかたちに造られた人間なのです。運命論は、真理ではありません。不条理の世界の論理です。それに対して、私たちは真理に生きています。真理とは、神が私たちをキリストにあって選んでくださったこと、そして私たちも選ぶことの出来る人間として造られたということです。

私たちは、選ぶことで人生を変えることが出来るのです。確かに、自分がどこに生まれ、どのような両親のもとに育ち、誰と出会い、どんな出来事を経験したのかは、自分で選んだわけではありません。しかし、その中で、どう生きるかは自分で選ぶことが出来ます。たとえば辛い環境に生まれたからといって、辛い人生を歩まなければならないという決まりはありません。良い人生を歩む道を選ぶことが出来るのです。

盲人は、不条理という道ばたに留まり、運命論者になり、人生の責任を転嫁し、諦めの人生を選ぶこともできました。しかし、彼は、叫ぶことを選びました。黙らないことを選びました。そして、イエスが救い主であると信じることを選びました。さらに、目が見えるようになることはイエスの御心であることを信じました。

イエスは、私たちのことばを引き出すことで人格を回復し、信じること、選ぶことが出来るようにして下さるのです。選ぶことが出来るということは、人生を変えることが出来るということです。

ある場合には、主に尋ねたいことが山ほどあるので、やがて主と顔と顔を合わせたその時のためにメモしている人がいたそうです。その気持ちは分かります。しかし、おそらく、主の前に立ち、主を目の当たりにしたとき、一つも尋ねないだろうと思います。今ここに主と共にいる、すべてがこのためであったという結末を見たとき、その事実だけ十分なのだと思います。

私の妻は、11月にガンの宣告を受けました。平均生存期間というものを知らされたとき、私たちは手を取って祈りました。その中で、前日の祈禱会で聴いていた御言葉「イエスは答えられた。『この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。』」（ヨハネ9：3）を唱えたとき、妻は「御言葉が、全身の細胞に沁み渡った」と表現しました。

「何のため」かが最初から明確に示されたので、私たちの内から「なぜ」という思いは全く出て来ないのです。

主の御声を聴き、主に叫び、主の御心を選ぶとき、不条理の檻は打ち砕かれ、私たちの魂は真の自由を得るのです。そして、主を崇める者とされ、さらにそれを見た人たちが神を賛美し始めるのです。そのように神の栄光は拡がり続けるのです。

